

鹿児島県の歴史・文化再考

松尾千歳

はじめに

私が、鹿児島県の歴史・文化を調査・研究するようになって約三十年、研究をすればするほど鹿児島県の歴史・文化がうまく伝わっていないと感じている。

私自身がそうであったが、鹿児島県の歴史というと、幕末維新期の西郷隆盛・大久保利通らの活躍に目が向きがちである。かつては鹿児島県で歴史研究、特に近世史・近代史の研究といえば西郷・大久保に関するものが主であった。原口虎夫先生や五味克夫先生、芳即正先生、原口泉先生らの尽力で、こうした状況が変わってきたが、私ですらある著名な西郷研究者から「君はなぜ西郷先生の研究をしないのか」と強い口調で迫られたこともあるくらいで、状況が大きく変わったのはここ二、三十年のことである。

もちろん、西郷や大久保が活躍したのは紛れもない事実であり、彼らに関する研究も大切である。だが、長年にわたって、それに偏りすぎた状況が続き、彼らが活躍できた背景、鹿児島県の歴史・文化の特異性・すごさについては、あまり感心が払われず、調査・研究は遅れ、情報もあまり発信されてこなかった。このため西郷ら下級武士を取り巻く歴史・文化が、鹿児島県の歴史・文化と誤解されてしまったのではないかと感じている。

また、現代的な感覚で、鹿児島県は京都や江戸・大阪から遠く離れた辺境、中央で生まれた文化が最後に伝わってくる後進地、文化水準も技術水準も低く貧しいところと思われがちである。確かに有職故実・能や茶道などの儀礼や芸能など、中央で生まれた文化が伝わってくるのは遅かったかもしれないが、鉄砲やキリスト教、朱子学、サツマイモ・孟宗

竹、蒸留技術など、海外からまず南九州に伝わり、その後、日本各地へと広まったものも多い。鹿児島は先進地であり、文化水準も技術水準も高い所なのである。

鹿児島県の歴史・文化の特異性・すごさについて、海外との交流を通じて見てみたい。

海の道

帆船の時代、南九州から屋久島・種子島、さらに南のトカラ列島・奄美諸島・沖縄の島々を経て、中国大陸へと伸びた海上交易路「海の道」「海上の道」は、大陸と日本とを繋ぐ大動脈であった。

いつ頃から「海の道」を船が行き交うようになったか定かではないが、3世紀から7世紀頃の広田遺跡（南種子町）から出土した貝製品に施された文様が、古代中国の青銅器の文様に酷似していることなどから、弥生時代にはすでに交流があったと考えられている。

南九州は海外交易の拠点であり、湊は外国の船であふれ、町には多くの外国人が行き交っていた。また、日本各地から海外へ向かう船・人も集まってきていた。いかに多くの船が行き交っていたか、一例を示せば、万暦22年（1594）福建巡撫（長官）許孚遠が皇帝に上申した「請計處倭酋疏」には「薩摩は様々な国の船がいつも停泊しているところである。今（薩摩に滞在していた時）もここから呂宋（フィリッピン）に向かう船が三隻、交趾（ベトナム北部辺り）船が三隻、柬埔寨船が一隻、暹羅（タイ）船が一隻、仏郎機（ヨーロッパ）船が二隻あった」と記されている。

実はこの「請計處倭酋疏」は、島津と手を組んで豊臣秀吉を討つことの許可を皇帝に求めたもので、紹介した部分は、福建を出港した商船に乗り込んで薩摩の状況を偵察した工作員（スパイ）の報告である。工作員の報告であるため、自国（中国）船に関する記述はないが、工作員が乗ってきた商船を含め、多数の中国船も停泊していたのであろう。

また、南九州のあちらこちらに外国人居留地も形成されていた。それは残された地名からもうかがえる。唐湊（鹿児島市）・唐仁原（南さつま市）・唐仁町（霧島市国分中央・東串良町・いちき串木野市港町など）・当房（唐坊、南さつま市）などである。

鹿児島純心短期大学のある唐湊（唐渚），今は海岸船から遠く離れた所となっているが，天保14年（1843）に編纂された『三国名勝図会』の巻7に「唐渚 府城の南中村にあり，此所古へ海湾にして，唐土の来舶泊繫せるゆゑに，唐渚の名ありといひ伝ふ，則ち側に船繫の松とてありし，近きに枯れたり，此地今海浜を距ること遠く，変して田野となれり，ここに弁才天社あり，唐人の建立といへり，これを雀が宮と名づく，鳥居の傍に碇捨池あり，唐人碇を捨しとそ」とある。かつて短大校舎のすぐ下まで海が迫り，そこには中国船が浮かび，中国人たちが暮らしていたのである。また，日本人で「唐湊」をすぐ「とそ」と読める人は少ないであろう。中国語では「タンツォ」，中国語の発音が地名として受け継がれている可能性もある。

次にヨーロッパとの交流を見てみよう。日欧の交流も南九州から始まった。16世紀，ヨーロッパ人たちが「海の道」を北上して日本へやってきたからである。1543年（1542年とも）のポルトガル人の種子島漂着（鉄砲伝来・西欧人の日本発見），1549年のザビエル鹿児島上陸（キリスト教伝来）など，日本とヨーロッパの出会いにとって重要な出来事が南九州で相次いで起こったのは，決して偶然ではなく，ヨーロッパ人たちが「海の道」を北上してきた結果にすぎない。

例えば，ザビエルは，ポルトガル商人ジョルジェ・アルバレスと，彼がマラッカまで連れてきた鹿児島出身のアンジロー（ヤジロー）に勧められて日本布教を決心し，1549年4月15日，アンジローを伴ってインドのゴアを出発，マラッカ・コーチシナ（ベトナム）・広東・福建の沖を通り，「海の道」を北上，同年8月15日鹿児島に上陸している。

ザビエルは，日本に向かう前，アルバレスに日本に関するレポートを求めている。それがアルバレスの「日本報告」である。「日本報告」は，来日経験があるヨーロッパ人が初めて書いた紀行文であるが，それには，日本にある町として *facata*（博多），*amgune*（阿久根），*quemdemavyn*（京泊），*aquyme*（秋目），*boo*（坊），*amamgoao*（山川），*quamguasuma*（鹿児島），*neguyme*（根占），*mynato*（湊），*tanora*（外浦），*doxyrna*（ドシマ），*firynga*（日向），*bumguo*（豊後），*xaquenou*（シヤケノウ）が挙げられている。大半が南九州の町である。さらに，海岸でお湯が沸くので砂を掘って入浴しているとか，米から作るオラーク

(蒸留酒、米焼酎)を飲むなど、記述内容の大半が南九州の状況を示したもので、日欧交流の初期段階、南九州がその舞台であったことを示している。

また、鹿児島県に到着したザビエルは、11月5日ゴアのイエズス会員に宛てて書状を送っている。「マグナ・カルタ（大書簡）」と呼ばれ、ザビエル書簡の中でも特に珍重されているものである。

それには、「この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何ものよりも名誉を重んじます。大部分の人びとは貧しいのですが、武士も、そうでない人びとも、貧しいことを不名誉とは思っていません」「大部分の人は読み書きができます」「この地の人びとは不思議なほど健康で、老人たちがたくさんいます」などと、日本人のことが絶賛されている。日本・日本人とあるが、ザビエルは鹿児島県以外の所にまだ行っていない。鹿児島県しか知らないのである。書かれている内容は鹿児島県の状況で、世界各地を旅したザビエルにこう評価されるほど、鹿児島県は文化水準が高く、秩序がとれた所だったのである。

異国情緒

江戸時代、徳川幕府が鎖国令を出すと、南九州で諸外国と交易することは禁じられた。しかし、外国との交易が完全に断ち切られたわけではなかった。

鎖国令が出される前、慶長14年（1609）、薩摩藩は琉球王国に武力侵攻して支配下に収めていた。この琉球侵攻は領土獲得が目的ではなかった。当時、琉球王国は中国の冊封体制に組み込まれていた。琉球国王という位は、中国皇帝から授けられるものであった。家臣である琉球国王は主の皇帝に定期的に貢ぎ物を献げ（進貢）、皇帝からは莫大な回賜品が授けられた。これが冊封貿易である。この利益を確保するための出兵であった。

冊封貿易を維持するには、琉球王国を存続させる必要があった。このため薩摩藩は異国である琉球王国を間接的に支配する形態を採らざるを

得なかった。異国を支配していた藩など他にない。そして、その琉球王国では、鎖国令が出された後も、幕府承認のもと中国との交易が続けられていた。さらに、この琉球口貿易を隠れ蓑とした抜け荷も盛んにおこなわれていた。

元来、海外交易の拠点であり、鎖国令施行後も、外国の物資・文化が流入し続けたため、薩摩は異国情緒あふれる地となっていた。いかに先進的で異国情緒あふれる文化が育まれていたか、食文化と出版文化を例に見てみたい。

【食文化】

薩摩の郷土料理は、日本料理を基本としつつ、中国や朝鮮、さらに東南アジアの食文化の影響を強く受けている。

例えば、獣肉食。日本では仏教の「殺生禁断」と神道の「けがれ」の思想の影響で獣肉食がタブー視されてきた。ところが薩摩藩内では公然と獣肉が食されていた。これは中国・琉球の食文化の影響と言われている。東京都港区教育委員会が、1996年度と1997年度、港区芝三丁目の薩摩藩邸跡の発掘調査をおこなっているが、その際も大量の獣骨が出土し、関係者を驚かせた。その大半はイノシシかブタの骨であった。他藩の藩邸跡からは獣骨はあまり出土しない。たまに出土しても犬・猫・馬などの骨である。薩摩藩が独自の食文化を持っていたことがうかがえる。

また、サツマ揚げ（つけ揚げ）は琉球の「チキアーギー」の変形で、もともとは中国南部のものといわれている。鹿児島特産のサツマイモは、中央アメリカ原産でフィリピン・中国・琉球を経由して伝えられた。サトウキビはインド原産で、やはり中国を経由して伝えられた。この他、インドネシア原産のニガウリや東南アジア原産のトウガン・ヘチマといった南方系野菜も郷土料理でよく利用されている。今日、日本各地で「サツマ揚げ」「サツマイモ」という呼称が定着しているのは、薩摩の先進性を示している。

さらに、いまブームとなっている芋焼酎も、日本酒文化が根底にあり、それにメソポタミアで生まれ中国などを経て伝わった蒸留技術や、中央アメリカ原産のサツマイモなどが融合されて生まれたものである。そし

で南九州にまず根をおろし、日本各地へと広まっている。

【出版文化】

南九州で最初に出版を手がけたのは、^{けいあんげんじゅ}桂庵玄樹ら薩南学派の学僧たちであった。桂庵は、文明10年（1478）、11代^{ただまさ}鳥津忠昌に招かれて来薩し朱子学を広めた。文明13年と延徳4年（1492）に『大学章句』を刊行しているが、これは日本で初めて朱熹の新註を紹介した刊行物であった。

桂庵が起こした学統を薩南学派という。^{げつしよげんとく}月渚玄得・^{しゆんでんこうおう}舜田耕翁・^{ぶんしげんしやう}一翁玄心・^{とまりじよちく}文之玄昌・泊如竹といった学僧が室町時代末から江戸初期にかけて活躍した。如竹は桂庵が著した『家法俊点』を、文之は『南浦文集』^{ししよしつちゆう}『四書集註』『周易伝義』などを京都で刊行し、わが国の朱子学隆盛に貢献した。

南九州にいち早く朱子学が根付いたのも、海外交易とは無縁ではない。禅僧は外交文書を手がける外交官でもあった。南九州の禅僧は、外国人と接する機会も多く、漢学の素養・感心も高かった。そこに桂庵という優れた指導者が現れたため、瞬間に朱子学が広まったのである。京都で藤原惺窩が京学派を興すのが、桂庵の来薩から100年以上後、16世紀末であるから、南九州の先進性が見て取れよう。

また、江戸時代中期以降、幕府・諸藩は出版事業に力を注ぐようになった。そのきっかけは、薩摩藩主^{りくゆんぎ}島津吉貴が琉球経由で『六論衍義』（「六論」は清の世祖順治帝が1652年勅諭として発布した教訓。「衍義」はその解説書）を入手し、それを8代将軍徳川吉宗に献上したことであった。この本に感銘を受けた吉宗は、享保7年（1722）『六論衍義大意』を刊行、これ以後、数多くの書籍を出版し、学術振興に力を注いだ。そして諸藩もこれにならったのである。

諸藩が公的に出版したものを藩版という。藩版かそうでないか不明なものも多く、正確な数は示すことが出来ないが、出版種目が最も多いのは水戸藩で60余種、これに長州藩・薩摩藩・津藩が30余種と続く。平均は10種に満たないから、薩摩藩が出版事業に力を入れていたことがうかがえる。

さらに、他藩の出版物が歴史書・文学書・中国の古典類が主であるのに対し、薩摩藩の出版物は、『四書集註』『古文孝経』のような中国の古

典だけでなく、百科事典ともいうべき『せいけいざせつ成形図説』、薬用植物の効能を中国の学者に質問しその答えをまとめた『質問本草』、世界地図の『円球万国地海全図』、中国語辞典『南山俗語考』、西欧の科学技術を紹介した『えんせい ききじゆつ遠西奇器述』など、海外の情報・文化をも取れ入れたものが多く、バラエティーに富んでいる。鎖国の時代も海外に目を向けていたことがうかがえるのである。

西欧列強の外圧と幕末の動乱

19世紀、イギリス・フランスなど西欧列強は強大な軍事力を行使して、アジア・アフリカ諸国を次々と植民地化していた。その進出コースは、16世紀のポルトガル人たちとほぼ同じで、大西洋をアフリカ沿いに南下し、アラビア・インド・東南アジアを経て、中国・日本を目指すというものであった。このため、日本の最南端に位置する薩摩藩はその矢面に立たされることになった。

文政7年(1824)には宝島事件(薩摩藩士とイギリス船員の銃撃戦)、天保8年(1837)にはモリソン号事件(山川来航したアメリカ船を砲撃して追い払った)と、薩摩藩領内で偶発的な衝突も起こった。1840年には中国でアヘン戦争(1840~42)が始まり、アジア最大・最強と目されていた中国が西欧の島国イギリスに完敗した。これを機に、日本でも西欧列強に植民地化されるのではという危機感が高まるが、薩摩藩の場合、それが現実問題として降りかかってきた。アヘン戦争が終了した翌年、イギリス海軍の測量艦が琉球八重山・宮古島に来航、これ以後、毎年のようにイギリス・フランスの軍艦が琉球に来航し、軍事力をちらつかせながら通商を迫ったのである。

日本の他地域よりも早く、西欧列強の激しい外圧にさらされた薩摩藩は、その強大な軍事力に対抗するため、西欧の科学技術を導入して軍備の近代化に着手した。薩摩藩と長崎防衛を担う佐賀藩、この二つの藩が日本の近代化・工業化をリードすることになる。

嘉永4年(1851)には、島津なりあきら斉彬が藩主に就任した。斉彬は鹿児島郊外、磯に「集成館」という工場群を築き、ここを中核に製鉄・造砲・造船・化学・ガラス・紡績・写真・印刷・食品加工など多岐におよぶ事業を展開した。「集成館事業」である。

嘉永6年のペリー艦隊の浦賀来航を機に、日本国内は開国か攘夷（^{じょうい}外国人を打ち払うこと）かを巡って紛糾、また各地で近代化事業が着手された。

斉彬は攘夷論を「無謀の大和魂の議論」と一蹴した。幕府や他藩が大砲製造や軍艦建造など軍事主体の近代化事業を推進する中、「人の和はどんな城郭よりも勝る」「人の和は豊かな暮らしを保証することによって生まれる」と、「富国強兵」を唱え、軍事だけでなく、民需産業の育成・社会基盤の整備にも力を注いだ。さらに、「日本一致一体」と、幕府や藩という枠を越えて、日本が一丸となって近代化・工業化に取り組み、強く豊かな国造りをすべきだと考え、幕府を中核とした中央集権体制を確立しようとして公武合体を推進した。

安政5年（1858）、斉彬は急死したが、彼の遺志は弟の島津久光らが受け継いだ。

久光は、まず大久保利通ら藩内の攘夷論者を諫め、彼らが慕う斉彬の遺志実現のために協力するように論じて側近に登用、藩論の分裂を防いだ。その上で公武合体の実現を目指して行動した。文久2年（1862）の上京・幕政改革関与、元治元年（1864）の参与会議などである。また、公武合体の妨げとなる攘夷論者に対しては厳しい態度で臨み、文久3年には、会津藩と手を組んで、尊王攘夷を藩論に掲げる長州藩と公卿を京都から追放（八月十八日の政変）。翌元治元年、京都回復を目指して京都に進撃してきた長州藩兵を撃破した（禁門の変）。

ところが、元治元年（1864）の参与会議で徳川慶喜と久光の意見が対立した頃から、状況は変化してくる。元治2年（慶応元年）の第一次長州征伐で、薩摩藩は幕府軍に加わったものの、総督参謀に就任した西郷隆盛は、自ら岩国に乗り込み、長州藩三家老と四人の参謀の処刑という寛大な条件を示し、これを受け入れさせて長州藩を降伏させ、長州藩に打撃を与えることなく、征長軍を解散させてしまった。翌慶応2年正月には薩長同盟を締結、長州再征を企てた幕府の出兵命令を拒否した。

そして薩摩抜きでおこなわれた第二次長州征伐で幕府軍は大敗。その後、15代将軍となった慶喜が猛烈な巻き返しを図るが、薩摩・長州両藩はこれをはね返し、慶応4年（明治元年）旧幕府軍を撃破し明治政府を樹立させたのである。

斉彬死去から明治維新に至るこの動き、上記のように国内情勢を中心に見ていると、久光ら薩摩藩の動きは理解しづらい。佐幕的な動きをして、反幕的な長州藩と戦っていたはずなのに、いつの間にかその長州藩と手を組んでその幕府を倒してしまう。軸足が定まっていないかのようである。

だが、実際には久光らの基本方針にぶれはない。根底には、西欧諸国の植民地とならないため、また諸外国と対等につきあっていくには、日本を近代国家に生まれ代わらせなければならないという斉彬の考えがあり、その実現を目指していたのである。

久光らは、まず斉彬がおこなったように、公武合体により、幕府を中核とした近代国家樹立を目論んだ。だが、慶喜らによってその実現の道は閉ざされた。その後、試行錯誤を繰り返し、攘夷論を捨てた長州藩と手を組んで、封建体制の維持を図る徳川を倒し、明治政府を樹立させたのである。

明治維新は、徳川幕府を倒し、薩摩藩や長州藩がそれに取って代わるためのものではなかった。幕府や藩という枠を壊し、日本を近代国家に生まれ代わらせるための戦いであった。だから勝者の薩摩藩も無くなった。藩主島津氏をはじめ、戦いに勝った武士たちも特権を失った。勝者も敗者も、皆が犠牲を払い、産みの苦しみを味わったのである。

ただ久光にしてみれば、島津家が南九州の政治に全く関与できなくなるというのは想定外であったし、急激に進む西欧化は精神的な植民地化と映り、明治政府とは距離を置くようになった。また、薩摩の武士たちも、日本を近代国家にするという目的を理解していたのは一部で、大部分は命じられるまま戦争に参加しただけであった。その結果が特権喪失、先祖伝来の所領没収である。彼らにとって、明治維新は自分で自分の首をしめたようなものであった。その不満が西南戦争へと繋がったのである。

西南戦争という悲劇により、鹿児島は近代化に乗り遅れてしまうような形になってしまったが、斉彬が唱えた「富国強兵」は明治政府のスローガンとなり、多くの薩摩出身者が全国に散らばり近代日本の礎を築いていったのである。

おわりに

鹿児島県の歴史・文化を、つまみ食いしたような形で見ても、それだけでも日本の他地域とちょっと異なる特異なものであることは理解して頂けよう。鹿児島県の歴史・文化は決して閉鎖的・保守的・後進的なものだけではない。確かにそうした面も持ち合わせてはいるが、むしろ、開放的、革新的、先進的な部分の方が色濃い。

鹿児島県は長い間、自分たちの歴史・文化を見失う、見失いかけていたのではないかと思っている。

(尚古集成館副館長)